

カリストス・ウェア府主教の講演録で、12月号からの続きです。「一切のために爾に献りて」普段、何気なく耳にしている祈禱文かもしれません。しかし、「たてまつる」ことの深い意味を私たちは意識しているでしょうか。

道央宣教セミ・ブロック機関紙

(札幌・小樽・苫小牧)

会 報

2024.1.1. No.404

札幌ハリストス正教会 発行

発行責任者 管轄司祭 エフレム後藤悠太



札幌ハリストス正教会

〒062-0042 札幌市豊平区福住2条2丁目3番1号

TEL:011-852-5644 FAX:011-856-0818

郵便振替 02790-8-4469

<http://www.orthodox-jp.com/sapporo/>

E-mail haris-sp@bz01.plala.or.jp

心を尽くし感謝して
世界を神に献げ返す(3)

三番目の問い、「聖使徒パウエルは自分が死を迎える前、何と書いているか」という問いに移りましょう。ティモフェイ後書4章6節には、「わたしは、すでに自身を犠牲としてささげている」と書かれています。ギリシャ語を文字通り読めば、「私は今、供え物として注がれている」となります。自分自身を注ぎ出して、自分自身を神に献げる贈り物としてはじめて、私達も聖使徒パウエルのように真の人間となるのです。

聖使徒パウエルの言葉によって、「献げる」という言葉の意味が鮮明に理解できるようになります。つまり、真の献げものとは、自分自身を献げるということであり、献げものとは、すなわち自己献祭 self-offering なのです。私達は自分の持っているものを神に献げるだけではなく、自分自体を神に献げなければいけません。聖体

礼儀において私達が献げるのは、パンとぶどう酒だけではありません。自分自身を生きた供えものとして献げます。

しかし、この聖使徒パウエルの言葉は、献げものについてより深い理解を示してもいます。この言葉は私達に対して、致命者としての死を選ぶべきであることを投げかけています。「わたしは、すでに自身を犠牲としてささげている」、つまり自己献祭とは、犠牲です。献げものが真の価値を得るためには、犠牲を払い、損失を出さなければいけません。預言者ダヴィド王が言うように、「わたしは費用をかけずに燔祭をわたしの神、主にささげることほしない」(サムエル下24:24)のです。神の母は神殿において我が子を差し出しました。その時にシメオンが彼女に投げかけた言葉を、今、この文脈において思い出してみましょう。シメオンは彼女にこのように警告します。「あなた自

身もつぎで胸を刺し貫かれるでしょう」(ルカ 2:35)。彼女がイイススの十字架のもとにたたずんでいる時、この言葉は実現します。十字架を担わずには、自己献祭はなし得ません。

主日の早課ではこのように歌われます。「十字架にてよろこびは全世界にのぞめり」。十字架によって、喜びが全世界へと及びました。逆に言いますと十字架による以外、喜びに至る道はありません。神現祭の大聖水式において何が行われているのか、考えてみましょう。まず、神が水を創造されたことを讃美する祈祷が行われます。この祈祷によって、感謝のうちに世界を神に献げ返すのです。しかし、次に神現祭の聖水式において決定的な時が訪れます。つまり、「十字架」が水の中へ沈められるのです。

自己献祭のうちに、真の人間性が表されます。そして喜びに溢れ、自分の意志の働きにより、それは表されます。しかし、私たちは罪深い世界に生きているがために、その罪深さを共有しているがために、自己献祭には苦痛も伴われます。サーロフの聖セラフィムはこのように言いました。「悲しみのないところには、救いもない」。

葬儀屋の窓に、私はこのような看板を見たことがあります。『十字架、あるいは栄冠の注文を承ります』しかし、実際には二者択一はあり得ません。どちらかがなければ、もう一方もあり得ません。私たちは「あなたのものを、あなたの賜物の中から」献げるのです。

ここで二つのポイントに気づきます。一切は神から受けたものです。全ては賜物であり、無償の賜物です。私たちが神に献げることができるのは、ただただ神が与えてくださったからに過ぎません。再び預言者ダヴィド王の言葉を引用したいと思います。「しかしわれわれがこのように喜んでささげることができても、わたしは何者で

しょう。わたしの民は何でしょう。すべての物はあなたから出ます。われわれはあなたから受けて、あなたにささげたのです」。(歴代誌 29:14)これは、聖体礼儀のフレーズの元となる聖書の箇所です。

一切は神から受けたものです。そしてさらに言うと、ハリストスにおいて、ハリストスを通してのみ、私たちは献げることができます。聖体礼儀において、私たちは感謝のうちに世界を神に献げ返します。これは、確かなことです。また、確かに私たちは聖体礼儀において自分自身を献げます。しかし根源的な話をしますと、私たちが神に献げるのはハリストスなのです。私たちの献げものとは、ハリストスの自己献祭です。もし、私たちの救い主であるハリストスが愛のうちに自己を献げる、ということがなかったのなら、私たちは一切の献げものができなかつたことでしょう。イイスス・ハリストスは唯一の祭司であり、見えずして私たちと共におられるお方です。私たちはそのお方を献げます。イイスス・ハリストスこそが司禱するお方であり、司祭と会衆は一緒になって、ハリストスと共に司禱する者なのです。

これまで見てきたとおり、リトゥルギヤとは共有された行為という意味です。この概念にさらに深い意味を見出しましょう。つまり、行為は私たち人間の間で分かち合われるだけではなく、私たちがハリストスと分かち合うものでもあるのです。リトゥルギヤとはハリストスの行為であり、私たちはそこに参加します。実際、聖体礼儀の執行とは共同執行 cooperation なのです。このことは聖体礼儀の言葉において強調されます。「父と子と聖神の国は崇め讃めらる」という冒頭の讃美の言葉の前に、輔祭が司祭に対して言う言葉があります。輔祭は司祭に「主に礼拝を始める時が来た It

is time to begin the service to the Lord」と言います(※日本正教会訳は「主に事を行ふ時至れり」です。)。これは、アメリカ正教会で公に認められた翻訳です。確かに文法的にこのように訳すこともできますが、これは第118 聖詠 126 節の引用ですから、「主が行われる時が来た It is time for the Lord to act」と訳すこともできるでしょう。ヘブライ語聖書、あるいは七十人訳聖書をベースにした旧約聖書を翻訳する時、ほぼ全ての翻訳においてこのように訳されています。「行われる」とありますように、聖体礼儀は「言葉」だけではなく、「行為」でもあります。ハリストスは「このように言いなさい」ではなく、「このように行いなさい」(ルカ 22:19)と私たちに命じられました。

次に、聖体礼儀の行為とは、ただ単に私たちの行為であるばかりでなく、主の行為でもあります。「主が行われる時」なのです。このことは、大聖人が行われる前、ヘルヴィムの歌が歌われる間に祈られる司祭の祈祷文において、再び強調されます。その祈祷文とは、「爾は献ずる者と献ぜらるる者」というものです。このフレーズは、800年頃の聖体礼儀のテキストにおいて初めて見られるものです。しかし、このフレーズ自体はさらに古いものです。アレクサンドリヤの聖キリルの名前が冠せられた聖大木曜日の説教に、このフレーズは現れます。しかしこの説教は、史実としては400年3月29日に聖キリルの先駆者アレクサンドリヤのフェオフィルによってなされたものです。このように一つのフレーズについて、正確に年代を特定できるようなことはめったにありません。「爾は献ずる者と献ぜらるる者」、つまりハリストスは祭司でありながら犠牲でもあります。献げる者でありながら、献げものでもあります。

聖アウグスティンが言うように、「ハリストスは祭司であり、彼自身が献げる者でありながら、彼自身が献げられる者でもある」のです。信経が唱えられる間、平和の接吻が交わされる時、この真実は強調されます。「ハリストスは我等の間に在り」と司祭が言うと、もう一人の司祭は「誠まことに在り、復また永く在らんとす」と返します。ハリストスは見えざる祭司として、かけがえのない献げる者として、私たちの間に存在されます。もし私たちの教区の中で、この言葉を交わしながら全会衆で平和の接吻を行うことを復活させることができたのなら、有益なものとなるのではないのでしょうか。

聖金ロイオアンはこのように書いています。「ハリストスはおられる。初めの食卓(=機密の晩餐)を用意されたお方は、今この食卓(=聖体礼儀)を用意されるお方でもある。というのも、献げる我々がハリストスのお体と血にすでになっている、というよりもむしろ、ハリストスご自身にすでになっているからである。私たちのために十字架にかけられた、あのハリストスに我々はなっているのである。」金ロイオアンは続けます。「司祭は自分の舌を貸し、自分の手を提供しているに過ぎない。そのため、あなたのために機密を行っている司祭を見た時、司祭が機密を行っていると考えてはいけない。そうではなく、ハリストスが手を延ばされているのである。」ゲオルギイ・フロロスキー神父はこのように書いています。「ハリストスは教会において大祭司として働いておられる。機密は常に同一である。犠牲は一つであり、食卓は一つであり、祭司は同一の一人なのである。」これが「爾の賜を、爾の諸僕より、・・・献りて」というフレーズの隠された意味です。文法上は私たちが「献りて」となりますが、実際にはハリストスが献げているのです。

小樽教会 降誕祭

12月17日(日)、小樽教会にて降誕祭の聖体礼儀が前倒して行われました。すでに雪が積もり、なかなか参拝がかなわなかった方もおられましたが、イイススのご降誕を皆でお祝いすることができました。

「聖神を受けたわたしたちはハリストスのからだである。その意味では、今もハリストスの藉身(受肉)は今も続いている。」と後藤神父から説教がありました。祝賀会は行いませんでしたが、婦人会の方が参拝した方の

ために、お弁当やお菓子を用意してくださいました。準備等ありがとうございました。



婦人会 だより



12月6日(水)、降誕祭前の奉仕日に11名の方が来て下さいました。聖堂の燭台を磨き、床の蝋燭や汚れを取りながらお掃除しました。また信徒会館の窓も拭いてもらいました。寒い中のご奉仕感謝します。ありがとうございました。(パラスケワ中野良恵)

宣教リモート会議

11月25日(土)、北海道ブロックの宣教リモート会議が行われました。札幌管轄からは後藤神父の他、宣教委員のグリゴリイ森川兄(札幌)、誦経者ステファン鈴木兄(小樽)、マトフェイ平井兄(苫小牧)が参加されました。

今回は主に北海道ブロックで行われた宣教会議の反省を行いました。キャンプだホイ!については、コロナ禍後初めてキャンプを開催できたのが良かった、また聖歌研修会については、最近になって聖歌隊に入った方が参加でき勉強になった等、前向きな意見が多くみられました。

また、直近で行われる誦経者研

修会(札幌教会が会場で、企画も担当する)や、拡大宣教会議(リモートでの参加も可能かどうか模索する)、来年のキャンプだホイ!(場所は十勝エコロジーパーク(音更町十勝川温泉)、7月31日(水)~8月2日(金)の三日間の日程を予定)についても話し合われました。

最後に今後話し合うべき議題が何点か挙げられ、今後の課題となりました。

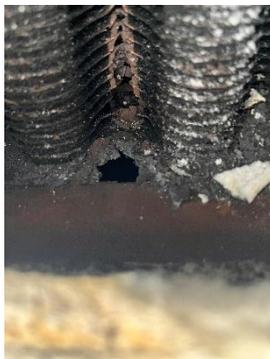


聖堂の暖房修理

12月11日(月)、聖堂の暖房を修理いたしました。以前にも不凍液が漏れるという故障があったばかりですが、今回はボイラーの中の熱交換器という部品が故障していることが分かりました。部品の交換、内部の清掃、さらに不凍液を購入し、154,000円ほど費用がかかっています。

なかなか業者の方の都合が合わず、寒い中祈祷することとなり、信徒の方にはご迷惑をおかけしました。また、

家庭用の暖房機をパルメン傳法執事長がご自宅から持ってきてくださいました。感謝いたします。



1月19日は神現祭！

主よ、爾は今日世界に現れ、爾の光は我等に印されたり、我等爾を承け認めて歌ふ、近づき難き光よ、爾来り、爾現れ給へり。

(神現祭のコンダク)

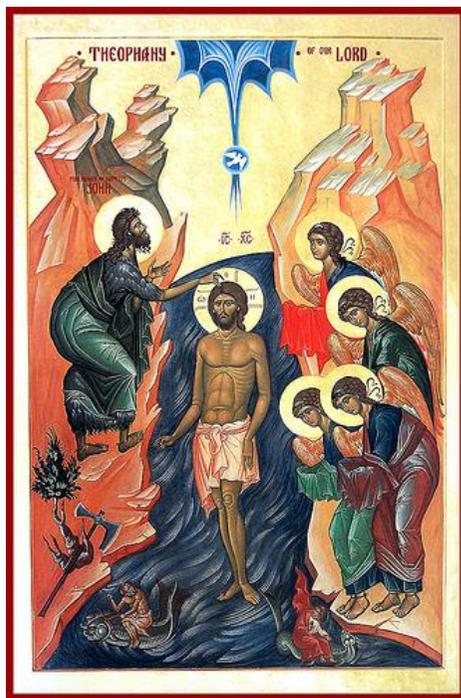
当日のみ行われます)。ただ、もう一つ大きなテーマがあります。それが「光」です。レフ・ジレ神父はこのように書いています。「古代のギリシャでは神現祭は『光の祭日』と呼ば

れていた。神現祭は私たちに清めという恵みだけではなく、光照(光に照らされること、以前には洗礼自体が光照と呼ばれていた)という恵みをもたらす。降誕祭では、ハリストスの光は暗い夜に輝く星でしかなかった。しかし、神現祭では、ハリストスの光は日の出の太陽のように輝く。」

私達はこれまで暗闇と無知と罪の中にいました。人知れず心に闇を抱えて生きてきました。しかし今、ハリストスの光が私たちに示されます。この光において、真実

1月19日に、正教会は神現祭をお祝いします。主イエスが前駆イオアンから洗礼を受けられたこと、またその時父と子と聖神が私たちに示されたことを記念します。神現祭では文字通り、至聖三者である神が現れたことを記憶するのです。

神現祭のテーマの一つはもちろん、「水」です。神現祭の聖体礼儀後には、大聖水式が行われます(通常、大聖水式は神現祭前日と



と愛の中に生きようではありませんか！